

# 企業宿舍域がバリアフリーで地域に同化

～富山黒部市の I-TOWN にて

23. 08. 24to

**はじめに;** 企業の単身寮や家族向け宿舎などは、従来は租界とはいわないまでも、あたかも別世界を構成しているかのようである。最近では、地域と融合、地域と同化といったことを目指して、宿舎の存在バンダリーをバリアフリー化できるようになってきた。ここでは、富山においてもそうした施設がつけられたので、これを見学記として紹介することにする。

## 1. 「I-TOWN」、第一印象

「I-TOWN」事業とは、黒部市生地地域での YKK の社員寮建設を地域環境保全の一環と位置付けた敷地面積 8505 m<sup>2</sup>、居住人員 94 人の街づくりであり、事業は 2022 年 4 月に着工し、2023 年 3 月に竣工(第一期 94 戸)した。新建富山ではさっそく「I-TOWN」見学会が企画され、これに参加した。

なぜ I-TOWN に興味を持ったのか。実は、1980 年代(青年期)に都会で 4 畳一室の単身寮生活を長く続けていたので、今の単身寮の様子を知りたくなり、また当地域の 10 年後 20 年後の姿を想像したくなったからである。

まずは現地にてびっくりしたのは二点。第一は、建築や街づくりに向けた企業(YKK)の活力と財力であり、社員への配慮はもちろんのこと地域への配慮として、生地駅周辺をも含めた街づくりを地域貢献の一環としていることである。

第二には、当プロジェクト担当の建築家竹内昌義氏と設計会社「みかんぐみ」のさわやかな感性が形になっていたことである。逆にいえば、YKKの「人や地域」への想いがうまく引き出されたというべきかもしれない。こうした建築観は、建築家竹内氏の果敢な挑戦そのものなのであろうが、思考・計算しつくされたなかにも卒業設計のときのような若者風の発想と感覚が垣間見られた。

## 2. 住まいや街、感じたことは

### 2.1 コンセプト、全体計画の印象

「I-TOWN」では、「職住接近のあたらしいかたちの街づくり」のコンセプトのもと若手社員寮 10 棟と食堂や大浴場などからなる共用棟(センターハウス)が地域環境に溶け込むよう街づくりとしている。

以下に、具体的な展開の様相について、パンフ等資料をも参考にして記す。

#### (1)地域環境づくりとして

生地駅一帯の街づくりを目標に、企業施設が地域のコミュニティと違和感なく景観もマッチさせて馴染むようにしている。

#### (2)職住接近

社員が YKK 黒部工場へ徒歩通勤できるように道路

網を含めて配置を計画している。

#### (3)当該域を小さな街として展開

社員寮を少数大規模棟とせず、(木造 2 階建て)小規模棟分散形式にし、プライベートモード(各居室)と共用モード(ランドリ、入浴、食事、くつろぎ・歓談、等)に分けて棟を配置し、かつ各棟を雁木通りで(小路のように)つなげている。社員寮(建物と周辺空間)そのものに庭や小路のあることで、小さな街が形成され、周辺地域との親和性を可能にしているといえる。

## 2.2 見て回って

### (1)行き交う人々

平日日中(勤務時間帯)には街に人がいないにもかかわらず、行き交う人、佇む人、話し声、といった街の息遣いというか人の姿の気配が感じられた。これは、街に歩行空間・(視線や視界確保の)脇空間を十分確保しているゆえであろう。この先、若い方々の生活と共に街が自然と土地にまみれ(馴染)ていくことであろう。

### (2)自然の中でのコミュニケーション

敷地内に各住居棟がゆったりと配置されているだけに、棟以外の空間には広がりがあり、木立や芝生の植生はいうに及ばず、玉石を線状に配置した黒部扇状の河原をもイメージした自然界がつけられている。そうした自然の庭を小路が横たわっているため、人の往来にも「のどかさ」と「ふれあい」があり、コミュニケーションが彩られることであろう。

### (3)地域と馴染む

往々にして企業の宿舎では宿舎をとり囲むフェンスがあるものだが、(隣地境界に一部はあったものの)「I-TOWN」ではそうした囲いがなかった。敷地内に道路を通して、囲い感をなくしている。こうして、敷地内各住戸にも自然と足が運ばれる雰囲気醸し出されている。ご近所さんにとってはお隣さん感覚が形成されることであろう(されているとのこと)。

### (4)支える技術

施設において導入されている技術には、各棟においてはエネルギーロスを抑える高気密高断熱技術があり、街全体やセンターハウス棟においてはバイオマスボイラーや太陽光発電(各棟屋根)による電力・エネルギーの生産・消費システム技術がある。近未来向けには、より広域にて電力・エネルギー供給新システムの導入が図られることであろう。

### 3. 生活の視点で

住民になったつもりで、施設における生活模様を思い浮かべてみる。まずは、全体として受ける印象は「質素」である。大企業だからゴージャスとはもちろん思わないが、暮らしの当たり前が自然と体に馴染むように思えた。事実、各棟居室やセンターハウスにも、また外構においてもそう感じた次第であり、これが地域への馴染づくりを可能にしていよう。

その一方で、生活の最前線に躍り出てくる最も身近な技術のひとつとして、スマホやそれに搭載のアプリといった情報系や便利系の技術が生活の隅々のまで入り込んでいる。研究者の間ではこの状況を「便利さから「かまはず」への転換」と捉えている。

前置きがやや長くなったが、こうした時代だからこそ、素朴な人間環境と便利さの環境とがどう折り合いをつけるのが以前にも増して問われていると考える。そこで、当該施設において素朴(いうなればローテク)と便利(いうなればハイテク)とがどう展開されているかを見よう。

#### 3.1 生活における備品や便利さツール

現代的なモードの実状として居室やセンターハウスにおける人間行動としてハイテクやローテクの様相を述べる。

##### (1)各戸の生活備品・設備

一昔前の一般単身寮ではありえない部屋の広さと備品の充実。

部屋の広さは10畳と結構広い。

至れり尽くせりの設備用品として、ベッド、ソファ、机、ハンガー掛け、TV、洗濯機、冷蔵庫、エアコン、トイレ、シャワー、ミニキッチン。

##### (2)購買にはスマホアプリ使用

センターハウスにある無人の売店はなんとなく駄菓子屋にみえた。そこではスマホアプリにて決済するので、売子のおばちゃんがおらず、自動販売機もない。くつろぎの場に自販機がないだけでも、何となく落ち着きを感じられ、しかも仲間内の利用者で集まりが賑わいをつくっていることが目に浮かんだ。

##### (3)カーシェアリング

職住接近なら車無し生活が可能である。時折の外出ならシェアカー(5台対象)で事足りるし、自転車利用もある。とはいえ種々の事を考えて、まあまあの広さの駐車場が敷地外にはある。車よりも歩きが今後とも定着するようお願いしたい。

### 3.2 生活における賑やかな社交

#### (1)コミュニケーションや賑いの誘発

各住戸の利便性を若干抑えぎみにして、住民がひきこもらず外向姿勢をとることでセンターハウスや庭にてコミュニケーションが盛り上げるように配慮されているという。人間、コミュニケーションの空間や外空間で佇めれば、自然と気持ちは広がり、そのようなノリが生活において楽しみにつながり、生活の多様性や地域や仲間との繋がりが形成されることであろう。

#### (2)食して歓談

センターハウスの食堂の設えは割合簡素である。設えの充足度がやや抑えられぎみにより、利用者の集まりが活力を生み出しやすくし、場の雰囲気がつくりだされているといえる。すなわち、食堂における人的環境が厨房の方々の面合わせや利用者どうしの歓談により賑わいを醸し出しているといえる。またオールタイムのお酒が場を一層盛り上げていることでしょう。

そんな光景を思い浮かべていると、食堂の空間そのものがそんな方々をさりげなく支援しているかのようにみえた。

### 4. おわりに

街づくりへの素朴な思いをもって I-TOWN を見学して、企業が進める街づくりの構想が理解できた。

末筆ながら、見学会を企画した方およびご案内頂いた YKK 不動産の方々に感謝申し上げます。なお文中では個人名を伏せた。



上写真； 当該施設パース センターハウス位置を記入 YKK 株式会社の I-TOWN の HP より  
下写真； 住居棟と雁木通り ご近所さんの邸宅と隣り合わせ